

紀
要

成安造形大学附属近江学研究所

第
10
号
—
2
0
2
0

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE OF
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN NO.10 — 2020

目次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告	3
-------------------------------	---

高梨 純次 公益財団法人秀明文化財団 (MHO MUSEUM) 理事／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

真野北村の「庚申講」	17
------------	----

三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ

加藤 賢治 成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

近江の懷をめぐる 4	27
------------	----

石川 亮 美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告

公益財団法人秀明文化財団 (MIHO MUSEUM) 理事／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

高梨 純次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告

公益財団法人秀明文化財団 (MIHO MUSEUM) 理事／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 高梨 純次

Name:

Junji TAKANASHI

Title:

Research Report on the wooden statues of *Acala (Fudo Myoo) with Two Attendants* at Josho-an Temple in Aisyo-cho, Echi-gun, Shiga prefecture

Summary:

Josho-an Temple located in Aisyo-cho, Echi-gun in Shiga prefecture was founded in 17th century by a nun whose Buddhist name was Josho-in. She was a wife of Kimata Moriyasu who served Hikone domain (present day Shiga prefecture) as a top-ranking samurai official (*karo*). Two sets of Kamakura-period Buddhist statues designated in Important Cultural Properties have been handed down from generation to generation in this temple. This report is on the research of the *Acala with Two Attendants*, one of the sets.

はじめに

滋賀県東部、湖東と呼ばれる地域の中で、天台宗の三つの古刹を「湖東三山」と呼び習わしている。そのうちの一つ金剛輪寺（滋賀県愛知郡愛荘町）は、開基を行基、慈覚大師円仁の中興と伝え、中世には多くの子院が建つ有力な天台寺院であった。その一角に寺跡を伝える常照庵は、彦根藩主井伊家の家老木俣守安の妻女で法名常照院によって承応二年（一六五三）以前に建立されたとみられる^{〔註1〕}。この常照庵は、現在、わずかな寺地と小堂を残すのみだが、木造阿弥陀如来坐像一軀とここに紹介する木造不動明王二童子像三軀が、重要文化財に指定され、もとは庫裏であったと伝わる場所に建つ文化財収蔵庫に安置されている。

私事に亘って恐縮ながら、この常照庵のすべての重要文化財指定の像については、平成二十三年（二〇一一）に、MIHO MUSEUM、滋賀県立近代美術館、大津市歴史博物館で合同開催された「神仏います近江」展にご出品いただいた^{〔註2〕}。当時、私は滋賀県立近代美術館で「第二部 祈りの国、近江の仏像―古代から中世へ―」のパートを担当、この二件四軀の尊像を展示・公開させていただいた。事前に、写真撮影を中心として、輸送や展示に関わる

保全確保のためもあって、作品調査もさせていただいた。しかし、正直に言うと、調査の主たる眼目は、木造阿弥陀如来坐像と金剛輪寺の本堂須弥壇に安置される、近江講師経円の手になる木造阿弥陀如来坐像との比較検討にあったといつてよい。頭体幹部を巨木一材製として、前後と左体側を割刳ぐ技法が共通するものであり、極めて特異な仕様になる二像が近接した場所に伝えられているからである。

一方、この三尊像については、まことに量感のある中尊像の洗練された作風に魅せられるとともに、特に股間にみられる截金と彩色文様の鮮やかさに注目が集まった。その彩色も、少し浮きや剥離がみられるものの、致命的なものではないと判断し、展覧会で展示・公開させていただいた。また、『秦荘の歴史』に、簡単な資料紹介が掲載されている^{〔註3〕}。

しかし、館の展示ケース内に安置し、日常業務として状態をチェックするなどしていると、不動明王像の鮮やかな彩色について、違和感を覚えてきた。有り体に言ってしまうと、この股間の彩色のみが際立って残りが良い、ということである。展覧会期間中は、忙しさに紛れてその違和感に向き合うことが出来なかったが、今回、お寺のご厚意により、再調査できることになった。今回は、複数のメンバーによる詳細な目視調査とともに、写真撮影、また赤外

線撮影も実施し、ある程度の報告ができることとなった^{〔註4〕}。以下は、その調査結果の報告である。

しかし、拙稿の内容は、淡々と調査内容を記述してゆくものであり、いわば極めて退屈な記述になっている。このような報告の掲載を許可して頂いた、近江学研究所には感謝しかない。重ねて機会があれば、この調査の成果に基づいて、この三尊像についての考察ができれば、喜ばしい限りである。

尊像の調査報告

以下、木造不動明王二童子像の概要について説明する。不動明王立像は像高一〇八・五センチ、制吒迦童子半跏像は像高二十九・九センチ、矜羯羅童子立像は像高五十四・二センチ^{〔註5〕}。いずれも木造、彩色、玉眼、重要文化財に指定されている。以下、各像の概要について説明してゆく。

(一) 木造不動明王立像 (写真1～8)

【形状】

巻髪として、左肩に弁髪を垂らす。額に皺を刻む。眉を彫出し、両目を見開いて玉眼を嵌入する。目は、瞳を墨として周囲を青・金・墨で括り、白目を表して周縁を赤で縁取る。鼻孔を表し、閉口して上下牙出し、上歯列四本で下唇を噛む。首の正面全体に三道を刻出し、胸の括れとその下に腹の括れ各一条を彫出し、臍を凹める。条帛をかけ、先端は正面で下層より垂下し、背面では肩下で上層より垂下する。

腰布をめぐらして正面で結び、結びの先端が股間の左右に垂下する。裳は腰で折り返し、左側の布を外にして、正面右脚の内側辺りで打ち合わせる。銅製鍍金の、胸飾・臂釧・腕釧・足釧をつける。右腕は垂下しながら屈臂して、右腰前で三鈷剣を握り、左腕は垂下しながら左前に突き出し、掌を上にして絹索を握る。両脚は、脛の半ば以下を露出し、左足を外に向け、足裏の角柄で岩座に立つ。

台座は、框の上に岩座とし、框に火炎光背をさす。

【彩色】

前記したように、正面股間の彩色は、大正の修理時に復元されたものと考えられる。全体を見渡しての違和感があり、かつ大正十三年の修理調査の見積内訳に、多種の顔料が挙げられており、この復元彩色に用いたとみられる^{〔註6〕}。従って、裳の彩色についてはそれも参考として、表面の観察や赤外線撮影の画像によって記述してゆく。

白地彩色。頭髮は黒で、肉身部は青黒色。条帛の表は、周縁部を截金二本の界線で区分する。内区は朱地（一部に橙色の彩色も見えるが）と思われ、地文様として截金で田相繫様の正方形の列を作るように、円で括った団花文を置く（赤外線撮影1～1）。腰布は、縁を二本の截金二組で括り、周縁と内区を分ける。周縁部は、青か緑系の地色とする。衣文の峰に截金線を置く（赤外線撮影1～2）。内区は分割して外側には縹縹彩色による猪目様の花文が雲気文を連ね、内側には同様の三弁花を描く。

裳は、縁を彩色と截金で縁取りし、周縁部と内区を截金で区画する。周縁部は、さらに截金で二区に分ける。その外縁は色帯で縁どる。外帯は内帯より幅広で、先が割れた七弁花（赤外線写真では、判然としないが六弁花様のものが見えるか、赤外線撮影1～3・1～4）を中心として左右に蔓を絡めて繋ぐ。内側帯は、斜線二本を交叉させて四区画した四弁花で、内側から緑系二段、その外にやや大振りの朱と橙色の縹縹彩色として金で括る。その両外に、緑系とみられる三山の雲形のような形をおき、その先は三方向に三弁の冠形をおいて周囲すべてを橙色の線で括り、その外側には朱系・橙色系の縹縹で緩いカーブの三弁を配する。この単位の花形の間隔の真ん中に六弁花の半折を上下に配し、その間を繋ぐ（判然とはしないが、四弁花の連なりの様な色料の重なりなどが認識できる、赤外線撮影1～3・1～4）。

内区の表を復元彩色によってみてゆくと（写真7【裳の彩色】）、地文は截金で正方形を斜めに連ねた斜格子で、交点には二重の正方形を描き、内部は八角形の中に四つ目を表す。その一部に截金で縁取りした空間を作り、中心から白黄系の四弁、内から濃朱・淡朱・淡橙色・白の縹縹で先端を三つにする八弁を表す。その外に、同様の縹縹による蕊二段とし、外側を濃緑とする六葉とその間に緑の三弁を置いて全てを白で括る。その外側には、中心を黄白から白をおき周囲を朱で括った内側が巻き込む猪目を連ねる。彩色は明らかではないが、左大腿部などに比較

的明瞭な前記した縹緗彩色の宝相華文や、截金などが確認できる（右大腿部側面などで宝相華文の形が捉えられている、赤外線撮影1-5）。裳の裏側は復元されていないが、周縁部は黄白系の色料が地色とみられ、縁を截金で括るよう、内区には内部に模様を納める二重菱繋ぎや小さな花丸文がみえる（明瞭には捉えられないが、花文などがあるか、赤外線撮影1-6）。復元された地色や地文、彩色文様などは一応当初の姿を表しているとみてよい。

【構造】

針葉樹材（ヒノキ）製。頭体幹部は、頭頂より背面地付高二十九センチまでと正面の裳先までを構成し、耳後ろから体側で前後に割放ち、三道下で割首として、内割りする。面部は別材製として玉眼を嵌入する。両膝以下足柄までを幹部材に差し込み（両足ともに外側に木心を外す材）、両足先は別材製とする。背面側の裳先は、両側各一材と中央に一材を刎いで構成する。両肩以下は、肩・肘・手首などで刎ぐ。

【保存】

後補については、検討を要するが、玉眼、金銅製装身具などが課題となる。正面股間の鮮やかな彩色は、大正修理時の復元とみられる。持物。台座・光背は後補。

（二）木造制吒迦童子半跏像（右脇侍）（写真9・14）

【形状】

髪は全体を平彫として、髪際に髪筋を截金で表し、後方に七束にして流し、先端を巻く。眉を彫出し、目を見開いて玉眼を嵌入する。目は、瞳を墨彩し、周囲を白群として墨で括り、白目を表す。鼻孔を穿つ。開口して、犬歯様の上牙を下出し、上下の歯列と舌を表す。やや右前を睨み、怒号する構え。胸と腹の括れ各一条を表す。大きな肩布を、背面左方から正面の左肩と両胸を覆い、右肩に被せて背中を大きく覆い、左肩から首下に潜らせて右胸で下層から垂下させ、腹前を横切って左後方になびく。腰布を巡らせて尻でふみ、正面で結ぶ。折り返し付きの裳を着ける。臂釧・腕釧・足釧をつける。右手は垂下して膝後ろで岩座につき、宝棒を握る。左手も左膝後ろで、肩布の先端近くを握る。岩座上で、左足を立膝状にしてやや浮かし、その内側を右足が交差するように通る。

台座は、框の上に岩座。

【彩色】

白地彩色。肉身体部は、頭部も含めてやや黒い朱彩とする。頭部は全体を朱彩し、頭髪は薄く墨彩し、髪際では髪筋に截金をおく。眉毛を墨彩し、唇はやや薄く墨をかけ、口中と舌は薄黒い朱彩とし、歯は白とする。肩布の彩色は判然としないが、黒みがかった黄土色の地色として、早蕨状の繋ぎ文のようなものがみえる（赤外線撮影2-1）。裏は黄土地にみえ、

白の点が複数残されている。

腰布も判然としない。表は地色が黒化しているが緑もみえる。表層は剥落が多く、丸菱様の輪郭らしきものがみられるが、基本的に不明。

裳の周縁部は、赤黒い地色があり、早蕨状の色料による痕跡がみえる。内区は、地文を截金の雷文とし、窠文を配する（赤外線撮影2-2・2-3）。右大腿部のは朱系の二本線で括り、内部は黒化した緑かとみられる色で中を埋め、中央に黒化した八点を巡らす八弁花を置く。左腰奥の折返しの下では、截金の雷文繋ぎとともに朱の地色の上に、内に巻き込まれた猪目様の黒化した線などがみられる（赤外線写真では、周縁を色線で両端を別の色料で括り、内部には両端が内に巻き込む雲文様の線描がみえる、赤外線撮影2-4）。裏面は、周縁部と内区を分け、周縁部は黒化した地色があり、内区は黄土系の地色が認められる（赤外線写真では文様などの有無を厳密には確認できない）。

【構造】

針葉樹材（ヒノキ）製とみられる。頭体幹部は、基本前後二材製とし、首下で割首として大きく内割りし、像内の大半は黒漆塗りとする。二材製とはいえ、比率的には、両側面の大半を前面材から構成しており、背面材は頭部から背面のやや右側寄りに地付高四・八センチまでを構成するもので、背板風にもみえる。割首については、背面側の頭部の材が、体部に深く食い込んでいる。背面地付高四・八セン

チは別材を矧ぐ。両脚部は、幹部前面材の前に奥行き二・五センチの材を矧ぎ、その前に大きく一材を矧いで大半を表し、左足首、左足裏真中で矧ぎ、右足真中で矧ぐ。両肩以下は、幹部材との矧ぎ面に板材をあて（左肩矧目は八センチ×三センチの材が像内から観察でき、右肩にも認められる）、左腕は肩・肘先・手首で、右腕は肩・手首で別材を矧ぐ。腕釧、足釧の結びなどは別材製。

【保存】

後補については検討を要するが、地付は全て修補。金属製装身具・持物は後補。台座後補。

（三）木造矧羯羅童子立像（左脇侍）（写真15（20））

【形状】

髪は平彫として髪際を表し、左右に美豆良状に束ね、後頭部では中央で左右に振り分ける。耳の前に、髻髪を墨描する。目は右方を見るように開く。玉眼嵌入、瞳は墨彩し、周囲を茶色として墨で括り、白目を描いて、目尻・目頭に朱を入れる。閉口する。胸・腹の括れ一条を表し、臍の括れも長く表す。条帛を背面では折り返ししながら巡らせ、先端を、正面は左胸で下層から、背面では右肩から直線的に上層より垂下する。腰布を巻いて、正面で結び、その両端が股間両脇を垂下する。裳は腰でわずかに折り返し、正面では膝下あたりまで、背面では足首上までを覆い、左からの布を外にして、正面やや右で打ち合わせる。胸飾をつけ、臂釧・腕釧と足釧を装着する。

右腕は垂下して、第一・二指で長茎の蓮華を執り、左腕は屈臂して前に突き出し、第一・三・四・五指を曲げて、独鈷杵を握る。腰をわずかに右に振り、左足を斜め外に向けて、足裏の角柄で岩座に立つ。台座は、框の上に岩座。

【彩色】

白地彩色。肉身部は朱系の肉色彩色。頭髮は薄く墨塗り。

条帛の表は、両端ともに二状の截金で周縁部と内区を分ける。周縁部は、縁に截金一条を入れ、地色は内区とともに朱彩。内区は、朱の地色の上に、截金で斜格子を表す。裏は黒化した地色が視認できるのみとなる。

腰布の表は、地色が青かとみられ、截金二本で周縁部と内区を分ける。周縁部の詳細は不明で、地色は内区と同色かとみられる。内区の文様は視認しにくいが、赤外線写真なども併用して推測すると、艶やかな大振りの花を表し、周縁部の境となる截金線より上に、五点を半円形に打ちその周縁に丸い花卉を描くような影がみえる。全体として、唐草状に宝相華をつなげながら、全体に花唐草があしらわれていると推測される（赤外線撮影3-1）。

裳は、截金三本で周縁部と内区を分ける。周縁部の縁は朱系の色帯を回し、黄土色系の地色の上に花唐草で満たす。内区は、地色を朱地としてその上やや黒ずんだ色をかけるようで、截金五本を一単位とする麻葉繫ぎを地文とする。その中に、截金二本

で丸く囲った中、中心に点を描いて周囲に六弁を表し、上下左右に一単位の花蔓を配した団花文を布置する。

【構造】

針葉樹材（ヒノキか）製。頭体幹部は、木心を正後方に外すとみられる一材製で、耳後ろから体側、踵のあたりで前後に割放ち、首下で割首として内刳りする。右肩以下は、肩・手首・指で矧ぎ、左肩以下は、肩・肘・手首・第二指を矧ぐ。美豆良、天衣遊離部、腰布の結び垂下部、右足は別材製とする。

【保存】

後補は、右足裏の角柄、金銅製装身具、持物。台座。

まとめにかえて

以上、三尊像の調査結果について、彩色は視認と赤外線撮影の分析をもとに述べてきた。既に紙数を大きく超過しているので、これ以上の検討は、機会を改めて行いたい。何れにしても、十三世紀初頭あたりの造像と推測できる。その一具性についての検討をはじめ、常照庵に伝えられる経緯の推測など、全てを課題として、筆を置くこととする。

註

1. 『近江愛智郡志』巻五「第十章 秦川村 常照庵」の記載、および掲載史料による。なお、木保安や関連史料について、彦根城博物館渡辺恒一氏よりご教示を得た。

2. 神仏います近江実行委員会編集・発行『特別展 神仏います近江』図録「第二部 祈りの国、近江の仏像―古代から中世へ―」に掲載。

3. 寺島典人「21木造不動明王二童子像」（秦荘町史編集委員会『秦荘の歴史 第四巻 資料』二〇〇九年）。

4. 調査は令和二年（二〇二〇）十月二十七日に実施した。参加者は、和澄浩介（滋賀県立琵琶湖文化館）、三井義勝（愛荘町立歴史文化博物館、桑原康郎、一村武司、辻上祐貴（以上 MIHO MUSEUM）の各氏と筆者。ここで述べている調査報告は、参加者の意見を集約したものであるが、文責が筆者にあることは言うまでもない。写真撮影は小池澄男氏（MIHO MUSEUM）による。

5. 今回の調査時に計測した法量の細目は、下表（表1）の通り。

6. 滋賀県文化財保護課古川史隆氏のご教示による。大正十三年修理時の、修理計画書及び見積書の中で、経費の内訳を箇条書きしている。その中には、「木材」から始まる材料の品目と数量が順次記録されている。そこには、「朱」「岱砂棒」「藍棒」「胡粉」「鉄粉」「真菰墨」「白緑」「緑青」「群青」「金箔」「金粉」が挙げられている。主に、彩色の復元に用いるためと推測できる。

調査を御許可いただいた、常照庵当局に心からお礼を申し上げます。また、赤外線撮影は和澄・桑原両氏の手になるものを掲載しました。併せて感謝申し上げます。

表 1

法量（単位は cm）	不動明王立像	右脇侍・制吒迦童子像	左脇侍・矜羯羅童子蔵
総高	131.6	48.9	69.1
像高	106.9	（坐勢）30.2	54.0
		（足裏）36.7	
髪際高	103.0	（坐勢）29.0	53.3
頂一顎	17.1	10.8	10.0
面長	12.5	9.1	7.9
面幅	10.1	6.8	6.2
耳張	14.9	8.8	（耳朵）7.7
			（美豆良）11.9
面奥	16.3	10.2	9.4
胸奥	（左・含条帛）17.0	（左・含背面布）11.1	（左・含条帛）10.3
	（右）16.4	（右・含肩布）11.1	（右）9.1
腹奥	17.5	10.7	9.9
肩張	23.1	12.3	12.6
肘張	35.3	22.9	18.4
裾張	26.0		14.5
足先開（外）	26.6		11.9
足先開（内）	18.3		6.6
膝張		21.9	
膝奥		（左足指―腰奥）30.7	
		（右手指―左布端）29.1	

台座・光背（最大）	不動明王立像	右脇侍・制吒迦童子像	左脇侍・矜羯羅童子蔵
台座・左右	72.9	36.4	36.3
台座・奥行	57.2	28.2	28.0
台座・高さ	33.8	21.5	23.9
光背・高さ（含柄）	157.5		
光背・左右	65.2		



写真 2 同（右斜め）



写真 1 木造不動明王立像（正面）

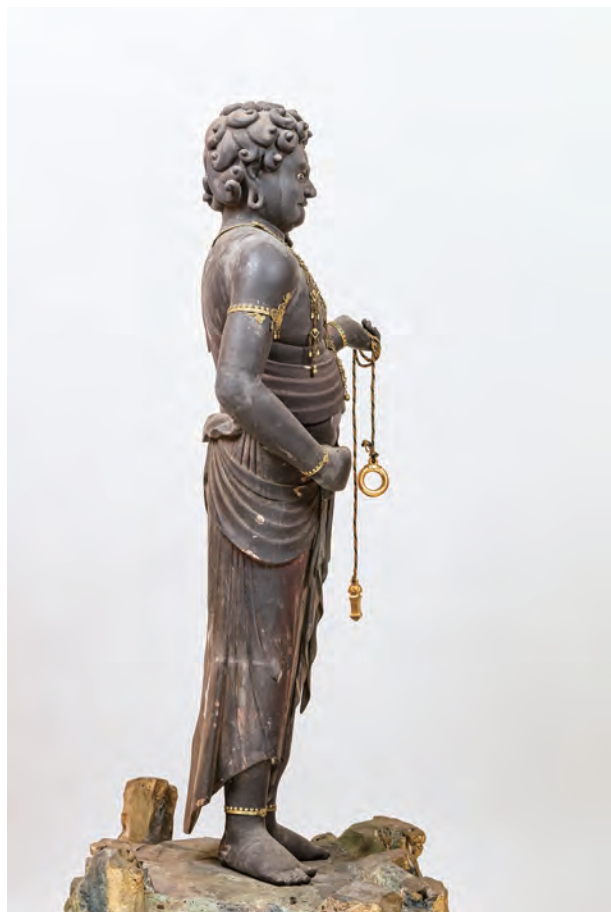


写真 4 同（右側面）

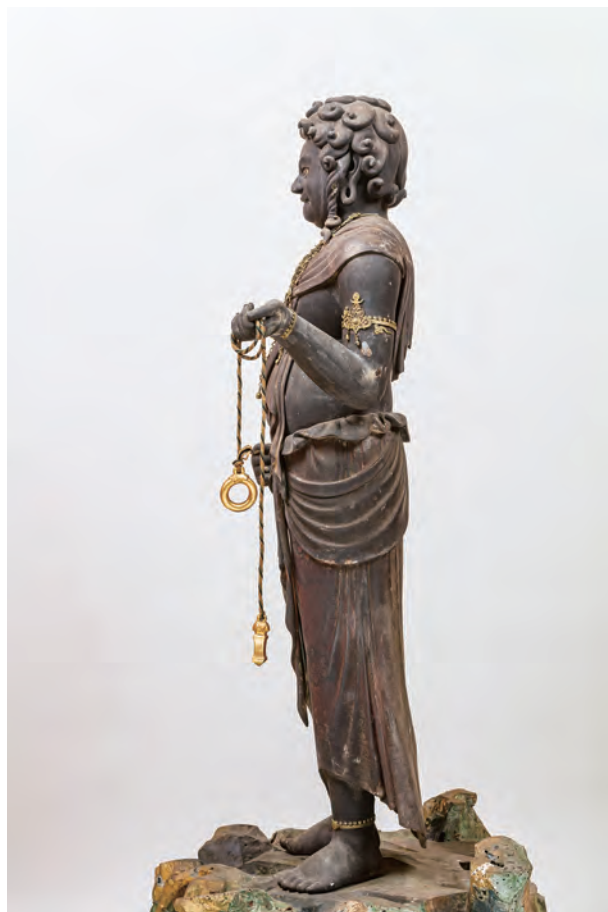


写真 3 同（左側面）



写真6 同（像底）

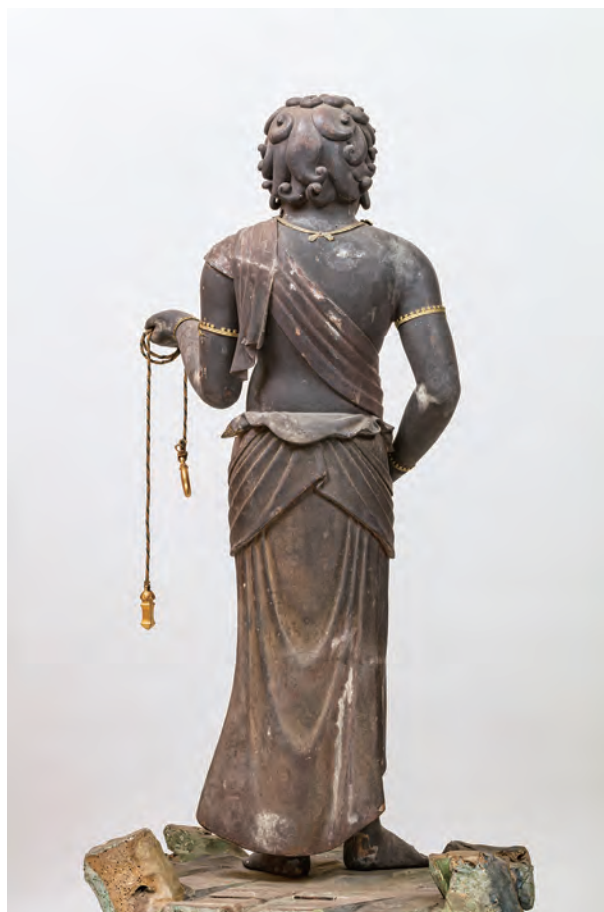


写真5 同（背面）



写真8 同（裳などの彩色・下半身右側面）



写真7 同（裳の彩色・復元か）



写真 10 同（右斜め）



写真 9 木造制吒迦童子半跏像・右脇侍（正面）



写真 12 同（右側面）



写真 11 同（左側面）



写真 14 同（像底）



写真 13 同（背面）



写真 16 同（右斜め）



写真 15 矜羯羅童子立像・左脇侍（正面）



写真 18 同（右側面）



写真 17 同（左側面）



写真 20 同（像底）

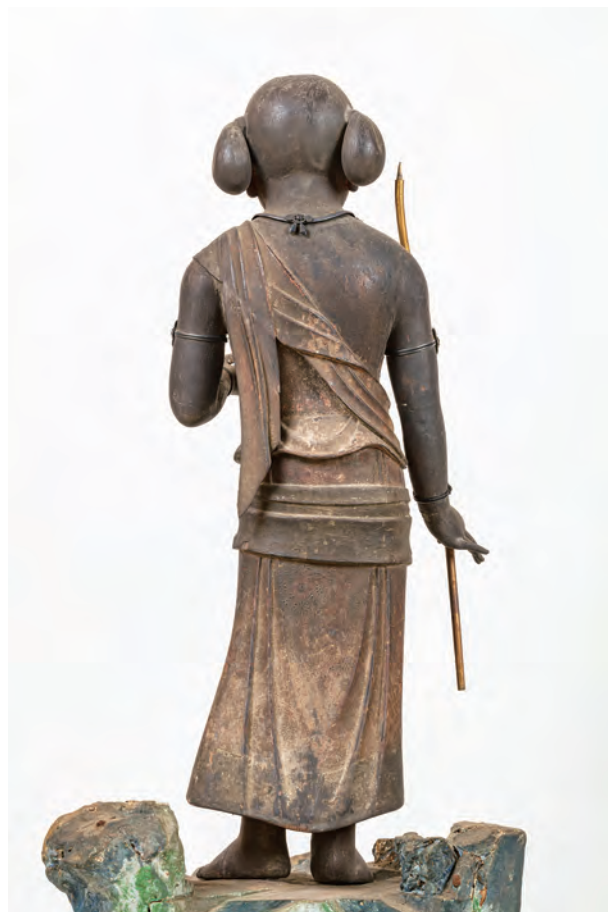


写真 19 同（背面）



赤外線撮影 1-2



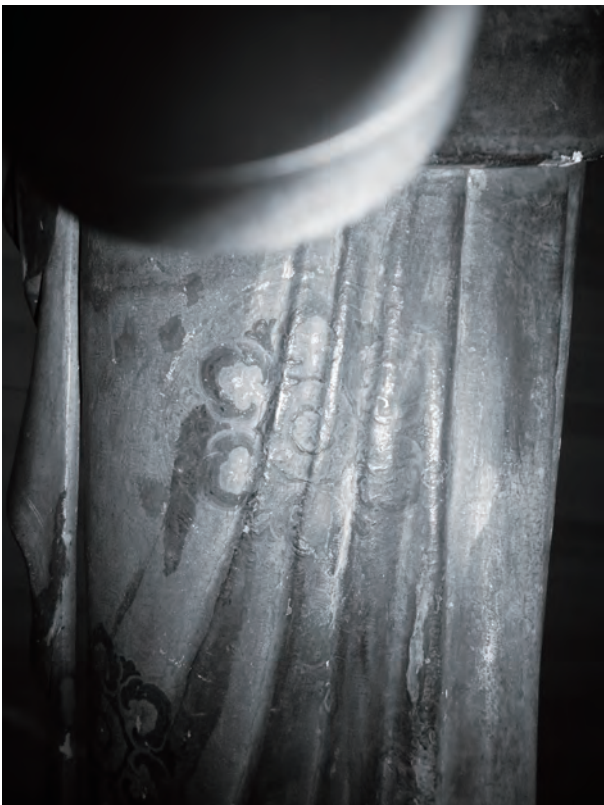
赤外線撮影 1-1



赤外線撮影 1-4



赤外線撮影 1-3



赤外線撮影 1-5



赤外線撮影 2-1



赤外線撮影 1-6



赤外線撮影 2-3



赤外線撮影 2-2



赤外線撮影 3-1



赤外線撮影 2-4

真野北村の「庚申講」

—三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ—

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤 賢治

真野北村の「庚申講」 ― 三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ ―

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

Kenji KATOH

Title:

Mano Kitamura's "Koshin-ko" (庚申講):
One Small Community Closely Connected for 300 Years

Summary:

In the Mano Kitamura district of Otsu City there is a "Koshin-ko" (庚申講) that has continued for 300 years. We will clarify the history and significance of "Koshin-ko" and consider the role and future of this small community in the present age.

大津市真野北村地区に三〇〇年続いてきた「庚申講」という「講」が存在する。「庚申講」の歴史と意義を明らかにし、現代におけるこの小さなコミュニティの役割とこれからのあり方を考察する。

はじめに

二〇二〇年の早春、中華人民共和国湖北省武漢市から発症したといわれる新型コロナウイルス(COVID-19)の拡大が収まらず、日本国内でも新型コロナウイルスの感染が広がり始め、同年四月七日には政府が一部の都道府県に緊急事態宣言を発令、県境を超える移動や人々が複数人集まる活動、夜間の飲食を伴う会合など、これまで普通に行われていた様々な活動を自粛しなければならないという事態となった。

滋賀県内も全国の動向に合わせ、教育機関においても、学校内の立ち入りまでが制限された。我々は、自宅において、インターネットを使ったオンラインでの授業運営の方法を学ぶことや、学生とのメールでのコミュニケーションなどの対応に追われた。しかし、人間は家の中という制限された空間では耐えられず、朝夕のちよつとした外出(散歩)が日課となった。

かつて、近江国においても例外ではなく、伝染病の恐怖に怯えた時期があり、天然痘、コレラ、スペインかぜなど、大きな被害を伴った経験を持つ。しかし、筆者は誕生して半世紀を少し超えたが、それらの渦中に巻き込まれたことは無い。過去の日本人はどのようにして伝染病という災いを逃れてきたのであろうかと思いつながら、何事もないように流れる真野川の水面や、琵琶湖真野浜の細波、道端に咲く野草、元氣なカラスや小鳥たちを眺めながら歩いた。

ある日の朝、真野の新しい都市計画道路の道端に大木が数本集まる鎮守の森のような雑木林があり、その横に真新しい木製の板塀に囲まれて佇む小さな一基の石塔を見つけた。石塔は高さ約九十センチ、一辺が約十センチの四角柱で、表面がザラザラした御影石である。よく目を凝らして見ると正面に「庚申」という二文字が浮かび上がってきた(写真1・2)。



写真1 真野の都市計画道路の端にある庚申塔

これは間違い無く庚申塔である。

民俗学に興味を持つ者であれば、江戸時代に全国各地の集落で信仰された庚申信仰のシンボルであるということは誰もが認知している。筆者もその一人なので、この石塔の文字を確認した時、自分が居住する足もとの真野地域にもこの信仰があったのだと興奮した。

この論考は、真野地域の旧字^{あざ}で今も継承されている「民間信仰（講）」についての記録である。以下に詳細を述べたいと思う。

第一章 庚申信仰とは

（一）庚申信仰の概略

庚申信仰の「庚申」とは、干支^{えと}いわゆる十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）の六十種類ある組み合わせの一つである。暦の中では、「庚申」を含む六十種類の干支は、六十年に一度、六十月に一度、日で言えば六十日に一度巡ってくるように設定されている。壬申^{じんしん}や戊辰^{ぼしん}などもその一つ



写真2 真野澤村の庚申塔

で、その年に勃発した反乱や戦^{いくさ}の名前となっている。その中でも庚申という干支は様々な伝説とともに、江戸時代には特別な日として扱われてきたのである。

元は中国の道教思想に由来するといわれるその伝説とは「本来人の体には、三戸^{さんし}の虫^{むし}という三匹の虫が住んでおり、その人が行った悪事を記憶して、庚申の日にその人が眠ると口から出て、天帝に告げ口をして寿命を縮める」というものである。「虫の知らせ」「腹の虫がおさまらない」などという言葉もここからきている。江戸時代の人々は、この日に眠るといけないということで、庚申の日にみんなで集まり、お互い眠らないように工夫をした。その数名の集まりを庚申講^{こうしんこう}、その行事を庚申待^{こうしんまち}と呼び、徐々に宴会が催されるなど娯楽性も加わって一般化していった。

さて、この庚申信仰は具体的にどの様に何時ごろ日本に入ってきたのであろうか。庚申信仰の研究は、路傍^{みちず}に佇む、無数の庚申塔と呼ばれる石塔の存在をきっかけに、学者や多くの在野の郷土史家による地道な研究の成果がある。その中で、窪徳忠氏（一九一三―二〇一〇）は『庚申信仰の研究^註』という著書によって民俗学研究の領域としてまとめあげた。

（二）庚申縁起

特筆されるのは、窪氏が『庚申信仰の研究』に掲載した「庚申縁起」と呼ばれる三十三編に及ぶ文書

である。それらは、窪氏によって全国から集められたものであるが、表現が似ているものなど多数あることから、大阪四天王寺の庚申堂縁起をもとにしているとも考えられるという。

その「庚申縁起」を要約すると以下の通りである。第四十二代文武天皇の時、大宝元年庚申の年の正月七日庚申の日に四天王寺行法尊記上人のところに、年の頃十六、七の童子が現れ、この寺が日本における仏法最初の霊地であるので、帝釈天の使いとして、庚申の法をここを拠点にあまねく広めよという勅旨を持ってきた。

庚申という日は、年に六度あり、年の初めの庚申は、地獄道の苦患を免れ、第二度目の庚申は餓鬼道の苦しみを逃れ、第三度目の庚申は、畜生道の苦を逃れ、第四度目の庚申は、修羅の苦を逃れ、第五度目の庚申は、人間の八苦罪を滅し給う。現世の災難、後世の苦しみを助ける。第六度目の庚申は天上の五衰体没の苦しみを救わんがためである。

庚申の日は、精進潔斎して、申の刻（午後四時）から南の方向につくった棚に、捧げ物をする。灯明をあげ、香を焚き、色よき花をたて、珍しい菓子のお供えをし、夜半に丸い供物と御酒とを捧げる。その夜は、荒い雑談をせず、腹を立てず、欲を言わず、男女の事を思わず、四足二足五辛の類を食べてはならない。

庚申の夜、もし眠るならば、三戸の虫が害をなすという。人の身のうちには三戸九虫という十二種

の虫がいて、この虫の仕業で、癡狂・癩瘡・狂気の病となり、あるいは盗賊悪党の心ができ、喧嘩口論となってその身を失う。

・この虫を退治するには、「ほうこうし、ほうぢょうし、みやうじし、しつにうやうてい、こりがしん」と南に向かつて拝み、三度唱えること。

・『夜もすがら 我はねざるの 此の床に ねたるもねずぞ しんはまさるぞ』と歯を鳴らし、三度唱えなさい。これまでのことが心の中を清浄にする大善根である」と童子が言つて青面金剛となつて姿を消した。

・暁、寅の刻（午前四時）、鶏が鳴を待つて、三十三度礼拝をしなければならぬ。

・庚申待は、三年で十八回行い、三年目には供養をしなければならぬ。供養とは道のほとりに塚をつくつて、四方正面の卒塔婆を建て、供物をするこゝで、往來の旅人もこれに施しをすること。そうすれば七難即滅、七福即成のご利益がある。

この「庚申縁起」をもとにして、近世、全国的に流布され各地で多少形や規模は変化しながら、戸主による集まりを庚申講、夜を通しての礼拝や遊興を庚申待ちと呼びながら現在に一部が伝わっている。

（三）庚申信仰の起源と広がり

では、どのようにこの庚申信仰が広まっていったのかについて考えてみたい。その考察については、様々な見解があるものの、窪徳忠氏は『庚申信仰の研究』の中で、「江戸時代に広く一般に庚申信仰が

普及した大きな原因の一つは、修験者の鼓吹にあつたように思われる。」と今後の研究課題として言及している。

その課題に対して筆者が注目しているのが、三井寺の長吏で仏教文化研究者でもある福家俊彦氏の見解である。福家氏は、「大津絵の誕生と三井寺別所の宗教文化圏」という論考の中で、三井寺とその周辺に位置する三井寺別所での大津絵師の活躍と彼らに描かれた青面金剛についての考察がなされている。そもそも初期に描かれた大津絵には仏画が多く、それは、仏教諸派の高度な仏教学に基づくものではなく、念仏聖や修験者が流布した仏教や神道、道教などが混じり合つた民間信仰であり、描かれた仏画は阿弥陀仏や大日如来、地藏菩薩や観音菩薩であり、それらは念仏講や日待講や月待講、地藏講や観音講などの本尊である。そして、現存する数から最も多く描かれていたであろうと思われるのが青面金剛であり、それが庚申信仰の守り本尊であると述べている。

福家氏は、「窪氏が室町後期以降に日本の庚申信仰を全く仏説化したのは、円珍の系統を引く、園城寺の加持祈祷を専門とする僧侶で、庚申縁起をまとめ上げて、本尊の青面金剛像とともに三井寺ゆかりの修験者などによって全国に広めていったと指摘している」としながら、『園城寺伝記』に庚申信仰の典拠となつた「庚申経」が所収されていることなどを根拠に庚申信仰の起源が三井寺にあると語っている。

青面金剛とともに大津絵によく描かれるものに「十三仏」というものがある。これは、十三仏信仰に基づいて描かれたもので、不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩：最後に虚空蔵菩薩が並び、人間の死後の魂が成仏するために七日ごとにこの世に残つた親族が礼拝する対象の十三の仏様をいう。この十三の仏様を全一枚の紙に描いた大津絵は、自分の死後の仏事を予め生きている間に行うという逆修仏事のためにあつたという。そう考えると、先述の庚申縁起の中に出てくる年に六度ある庚申の日に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道の世界を一つずつ祈つて死後の苦しみから逃れるのとも知れない。

ともあれ、庚申信仰は、江戸時代にあつて十三仏と同じく、死後の自分の魂の安寧を願つて、定期的に熱心に祈り続けてきたという一つの姿を見ることができると。そして、大津絵に描かれた青面金剛や十三仏とともに、庚申信仰は広く全国に流布されたのであろう。

第二章 真野北村の庚申講

（一）北村庚申講の発見

この章は、偶然筆者がコロナ禍の散歩によって発見するに至つた庚申塔について具体的に話を進めていきたい。筆者がまず思つたのは、この真野地域で、今も庚申講が存在しているのであろうかということ

である。そこでこの地域の歴史文化に詳しい真野澤地区の川中常夫氏を訪ねた。

川中氏によると、真野の澤地区にはかつて庚申講が存在したが、無くなってかなり年月が経つとのことであった。ただ、



写真3 願生寺境内の真野北村の庚申塔

同じく真野の北村地区の願生寺（浄土宗西山禅林寺派 大津市真野四丁目）の境内に北村の庚申塔があるとの教示があり当寺を訪ねた（写真3）。願生寺名譽住職根来旭氏から、真野北村地区では今も講が行なわれていると聞きおよび、その時の講の当番をされている濱本イク子氏を紹介いただいた。

ここで、北村集落についての概観を説明しておきたい。

北村集落はJR湖西線の小野駅と堅田駅間の小野駅寄りの線路沿いという、生活するのに便利なおりに位置するため、戦後の経済成長期に新興の住宅が増え、約五十軒が真野北村自治会を形成している。その内の十四軒は、檀那寺を願生寺、氏神を真野神田神社として、共有地を共同管理し、江戸時代から明治、大正期の伝統を受け継ぐ旧集落（北村集落）、「北村会」を構成している。そして、その中で、

庚申講を継承しているのが以下に述べる五軒の家である。

（二）北村庚申講の概略

北村の庚申講は、五軒の講員で構成され、庚申の日に近い日の夜に講が開かれているとのこと。講員は、夕食を済ませてから、十九時ごろ当番の家に集まる。座敷には、庚申講の守本尊である青面金剛が描かれた掛け軸がかけられ、色花が供えられる。掛け軸に手を合わせ、お下りの飲み物とお茶菓子を共食しながら、二時間程度、よもやま話をして解散するという。

二〇二〇年九月十八日、真野北村の庚申講に参加した。

この日は講員でこの会の当番である濱本イク子氏の自宅で十九時半から講が行われた。

講員は、

濱本正雄氏（八十六歳）

濱本傳氏（七十九歳）

谷正昭氏（六十四歳）

濱本昌嘉氏（六十二歳）（この日は妻の粮子氏が出席）

濱本イク子氏（七十七歳）

の五名（五軒）である（写真4・5）。

臨時につくられる祭壇は、写真にある通り、掛け軸は四天王寺と書かれた文字とともに青面金剛が描かれた比較的新しいもので、もう一つは愛宕講のものである。ここに集まる講員はこの講を基本的に「庚申講」と呼んでいるが、四年ほど前から愛宕講も重

ねて行われている。

濱本正雄氏と濱本昌嘉氏は愛宕講と庚申講の両講の講員であり、濱本イク子氏は元々愛宕講のみの講員であった。現在は、愛宕講も庚申講も上記の五名のみが受け継いでいるという現状であるので、庚申の日の前後に行う庚申講と愛宕講を同時に行うようになったという。

この講に伝わる小さな木箱が二つある。一つ目の木箱の蓋の裏には、「安政五年戊午年 十二月庚申講中」と記され、その箱の中には講が開かれる月とその月の当番の講員の名前が記入された「月取表」という紙が台帳のようにまとめられている。最も古い月取表は、正徳五年（一七一五）のものがあり、綺麗に保存され綴られていた。講の言い伝えでもこの年からこの講は始まったという（写真6）。



写真5 庚申講の様子 二〇二〇年九月十八日



写真4 庚申講の祭壇 二〇二〇年九月十八日の庚申講

もう一つは愛宕講のものと伝わる箱で、中には愛宕講と大師講の帳面が入っており、当番の人物の名前と供物の記録や、講で行われたことなどが記されている。箱の裏には、寛文六年（一六六六）という庚申講よりも古い日時が記されていた。

北村の庚申講は、始まりの時間がはっきりと設定されているだけでなく、当番宅に到着順から、祭壇に手を合わせ徐々に始まる。

毎回は、日常生活における話を中心に、十四軒あるという北村会の話や、檀那寺の行事の話などが話されているようである。今回は、筆者が入ったこともあり、少し以前の庚申講の話を聞くことができた。

以前は、七庚申講ななこうしんこうと言って、盛大に餅つきをしたという。また、三十年ほど前は婦人会的な雰囲気があり、女性たちの楽しい語りの場であった。北村には念仏講がついこの前まで行われており、檀那寺である願生寺にこの講の講員の他、北村会の全員が集まっていたという。

平成十二年



写真6 北村庚申講の「月取表」とそれが保管されてる木箱

（二〇〇〇）に誰かによって書き留められた資料を見せていただくことができた。そこには以下のようなことが書かれている。

北村七庚申講

（平成十二年十二月現在 発起より二八五年）

発起年：正徳五年（一七一五）

←（中御門天皇代 徳川七代將軍家継代）

庚申講塚建：明治三年（一八七〇）

←（伊太郎、源次郎、嘉平治、嘉郎、傳治、武介、友七）

庚申塔建立：明治四十三年（一九一〇）四

二五

←（門次郎、浅吉、嘉一郎、熊次郎、清次郎、傳治郎、伊之助、鶴松）

現地 東照山願生寺境内に移転：昭和四十一年

（一九六六）三

現在に至る（※庚申講発起年より平成十二年

（二〇〇〇）で二八五年を数える）現在北村会住民でおまもりをしている

この日の北村庚申講は、二十一時半、ちょうど始まって二時間ほどで解散となった。

（三）東京都練馬区の庚申講

江戸時代以降に広く全国で行われていたという庚申講であるが、一般的にはどのようなことが行われ

る講なのであろうか。

先述した窪徳忠氏の『庚申信仰の研究』には多くの庚申講の当時の実態が報告されているが、前述のとおり、北村の庚申講が庚申塔を願生寺に移転させた頃（昭和四十年ごろ）の事例として、東京を中心に関東の郷土史家として知られる平野実氏が、東京都練馬区で行われていた庚申講（当地では庚申待と言われている）を取材しているので取り上げてみたい。

平野氏は、著書『庚申信仰』^{註3}でその庚申講の様子を記しているので、以下に要約を紹介する。

江戸時代から続いているという昔の小字集落で受け継がれてきた講で、かつては小字全体が講に参加していたが、現在（当時）では十軒となっている。庚申の夜は、当番の家に集まり、座敷に掛け軸をかける。掛け軸の画面は、日月が瑞雲の上に描かれ、中央に六手の青面金剛の像が、そしてその下に三猿と雌雄の鶏が見える。この講は仏式であり、線香は立てるが、勤行や呪文、その他の唱え言などは無い。夕食に蕎麦が出され、食後は雑談となる。旅行へ行った話や、その時の失敗談、近くの嫁取りの話や、嫁の器量や芸事の話、そして猥談ともなると盛り上がる。その間には、茶や菓子が出され、信仰という雰囲気は全く無い。時間が経つと、軸の前に供えてある徳利二本の酒を下げて、少しずつ分けて飲む。深夜十二時頃になると白い米のご飯に、豆腐の味噌汁という夜食が出される。

楽しい夜食が終わると、この庚申講は夜明けを待

たずにお開きとなる。かつては朝まで継続していたであろうが、それを知っている講員はいない。

ここでの庚申さんは、口や目や耳などの病気を祈ると治してくれるという。しかし、庚申さんがどういう仏さんなのか、あるいは神様であるのか、また、なぜかつては徹夜をしていたのかという問いには、明確な答えや、信念を持っている講員は一人もいない。ただ、庚申の夜に男女が交わってできた子供は盗人になると言われているので、それを避けるために一晩中寝ないでいると答えた者があったという。

この夜の費用は、当番の家が酒を用意する他は、米を五合ずつ各家から集めてまかなうという。

以上が、練馬区で当時行われていた庚申講（庚申待）である。平野氏は、これは一例であるとしながら、同著で「庚申信仰の実情」という項で、関東地方の他の庚申講の様子も伝えている。

（四）全国各地の庚申講

以下は、平野氏の調査の要約である。

他の地域で見られる庚申講は、庚申さん、庚申待などとも呼ばれ、それを開催する頻度は、年に一回のところや、年のはじめと終わりの二回、ないし七回など、様々で、庚申の日に限らず都合の良い日に行われていたりする。

出席者は、元来男性だけであったが、男女が混ざった講や、女性のみの講もあった。講を行う時は、仏式の場合は仏壇のある床の間などに、青面金剛や帝釈天の掛け軸を掲げ、神式の場合は猿田彦の軸をか

ける。これに団子、菓子、花、線香などを供える。一同がそろって、勤行を行うところや般若心経を唱える、また庚申真言を唱えるなどこれも様々であったというが、現在（当時）では、形式的に合掌したり、拍手を打って拜むだけになっている。

それ以降は雑談となるが、「話は庚申の晩に」という諺があり、庚申の夜は、基本が徹夜であるから、十分に時間があるので、その時にゆっくり話そうということである。

また、この晩を利用して、無尽や積立金の集金をする、慰安旅行の計画を話し合うこともあった。明治時代までは賭博も公然と行われていたという。賭博が現代のように厳しく取り締まりがなかった頃は、庚申講の他に、月待講や、日待講、などでも賭け事が行われていた。

そして肝心な信仰としての庚申さんの御利益は、第一に長寿、第二に病の完治、第三に家内の繁栄、第四に豊作、第五に豊漁、第六に商売繁盛、第七に金銭に恵まれると言うのが一般的だという。

また庚申講の禁忌については、肉食や、同衾が最もよく言われ、その他、裁ちものをしてはならない、出産のあった家では講をしてはならないなどがある。

江戸時代以降、庚申講は広く全国に分布し、明治になって初めて行うところも多く見られたという。

（五）庚申講における七という数字

北村の庚申講で話されていた中で、七庚申の話題

があったが、この庚申講における七という数字について、先述の平野実氏の『庚申信仰』と、飯田道夫氏の『庚申信仰 庶民信仰の実像』^{註4}に詳しく記されているので、要約してみたい。

基本的には、七庚申を盛大に祭るという慣習が一般的で、ここから七という数字が特に注目されると考えられる。七庚申とは、一年間に庚申の日が七回ある年をいう。庚申の日は十干十二支の六十種類の組み合わせにより、六十日に一回まわってくる。したがって、概ね二ヶ月に一度庚申の日が来る計算になるが、そう単純ではない。江戸時代の暦は太陰暦（旧暦）であり、二十九日の月と三十日の月に分かれ、約三年に一度の閏月などが設定されることもあり、多少変則的に七回庚申の日が巡る年がある。また、年に五回のみ庚申の日がやってくる年は五庚申と呼ばれているが、七庚申の年より回数はかなり少ない。

慶長六年（一六〇一）から明治元年（一八六八）までの二六七年の間に、七庚申の年は、三十九回あり、五庚申の年は十七回である。七庚申の年は平均すると七年に一回やってくる計算になるが、先述の通り、不規則である。しかしながら、七庚申は珍しいということ、特に盛大に祭を行うという慣習が生まれたようである。ちなみに五庚申の祭りは特にみられない。

七という数字についても少し述べてみると、「庚申の夜には、七色菓子を供える」「庚申講は七人待衆という七人で結成する」「庚申の夜は、七度勤行を行う」「夜食を七度とる」などがあり、窪氏の庚

申信仰における供物の報告にも「七種の色ばな」「うどん・油揚げ・にんじん、ぜんまいのあえもの・天ぷら・麩など七種の御馳走」「七個の団子」「七個の餅」「七個の握飯」など七に関する全国各地の供物が多く紹介されている。ただ、窪氏はなぜ七なのかという見解は述べていないが、飯田氏は、七という数字について天台宗との関わりを指摘している。七の尊重は北辰崇拝に由来し、北斗七星もそこに含まれる。比叡山延暦寺が北方鎮護を自認しており、山頂の「七星降臨処」を聖蹟としている。また山王諸社が「山王七社」としてまとめられることも無視できないとしている。

民俗学者五来重氏も、その著書『註』で「庚申待には七色菓子をあげ、庚申待は暮七ツ時（午後四時）から明七ツ時（午前四時）までといい、功德は『七難即滅七福即生』という。…中略…そのいわれは、『庚』が十千の七番目だと言われるけれども、これは猿を（申）をまつる日吉（比叡）山王社が上七社、中七社、下七社の二十一社から成ることによるものである」としている。

庚申信仰の広がり、天台寺門宗総本山三井寺の修験者によるものとの指摘もここのうなずけることかもしれない。

第三章 講という小さな「コミュニティ」――

（一）庚申講の目的の変化

現在真野北村の庚申講にはどのような祈りが込め

られているのであろうか。柳田國男は、日本における庚申信仰は、最も慎しみ深いもので、心と身を清めて、悪念を遠ざけ、一夜を神の前に参籠することによって、団体共同の幸福を得ようとしていたと解釈している。

家族の延命長寿、五穀豊穡、疫病退散など、講員とその家族という共同体の幸福を祈ってきたに違いない。それも三〇〇年の歴史を持つのである。三〇〇年以上、二ヶ月に一度講員の先祖は集まり、親交を深めると同時に過去・現在・未来の幸福を祈つて来たのである。

先述した窪氏の三十三編に及ぶ「庚申縁起」の中には、逆修的な自らの魂の行く末を案じて祈ることや、三尸の虫を体内から出さないことで、自らの寿命を少しでも長く保ちたいという、非常に個人的な祈りをみんなで共有するという内容がみられた。庚申信仰が広まりを見せた江戸時代初期には、柳田が言うような共同体の幸福のための祈りというわけではなかったようである。

しかし、時代が降るとともにその内容は地域ごとにまた時代ごとに変化し、昭和期の東京都練馬区における平野氏の報告では、六道における死後の魂の行く末や三尸の虫の話は一切なく、真野北村で行われている内容と大きく変わらないようにも見えた。

元来、庚申講には、延命長寿などの祈りの部分と、集団で行う娯楽的なものが共存してきたと考えられるが、明治以降、近代に入ると信仰の面が次第に薄れ、共同体の楽しみのために盛り上がってきたよう

に見える。そして、高度経済成長期以降は、都会への通勤や夜の残業、夜間の娯楽が一般化するなどし、一時は家を守る女性の楽しみとして庚申講に女性が集まることになる時期もあったようだが、近年は、その講の役割も見えなくなり、ほとんどの庚申講は姿を消していった。

（二）真野北村の庚申講の一夜

二〇二〇年九月の取材時に語られた言葉を以下に記す。

「息子がこれが続けてくれるか全く不明。」

「やめると不幸があったと聞いている。」

「おしゃべりが好きなのでこんな機会があるのは嬉しい。」

「三〇〇年も続いているとは信じられへんな」

「やめるのは簡単。ご近所が寄り合うことは、この庚申さんを除いて今はほほえない。寄っているというんな話ができるので良いことだと思う。」

「庚申講は続かへんな。お寺の仏さんごともそうや。若いもんがしょうらへん。墓守るんも大変や。体いわたらできひん。墓のことわしら死んだら何もできひん。」

「庚申さんも説明のしようがないのでどうして良いかわからへん。コロナのことで、葬式も省略されている。そうはいくものの愛宕さんの横の地蔵さんはいつもふみえさんが面倒見てくれている。ありがたいことや。」

「昔は観音講が楽しかった。今はお葬式も家でしい

ひん。セレマでやるので、ご詠歌をあげることも無くなった。」

「正直、庚申さんは若い人に続けてもらいたい。」

「今まで庚申さんに関心がなかったけど、こうやって取材してくれはって、講の意味がわかってきた。昔はお母さんが行っていたので女性の講やと思っていた。わいわい集まっていたのが楽しかったとおばあさんも言ってた。」

「庚申さんでもできるだけのことしたら良いけど、どうしたら続けられるかわからへんな。みんな長生きしてください。」

「うちは嫁さんもあまり興味ない。掛け軸かけてみんな集まるだけの行事。何の意味があるのかな。」

月取り表によって、講が三〇〇年続いてきたと証明できる奇跡は、客観的に我々研究者から見ると大変貴重な話であり興味深く思うが、当事者である講員たちは、特にそれに大きな意味があるとも、大切な風習であるという意識もあまり無いようである。

ただ、この後、どのように講を継承していくのかという切実な心配があり、また、それは、講に限ったことではなくお墓の問題や、共有地の管理など、次の世代がどのように引き継いでくれるかについての危惧である。誰一人、この講が不必要であるという認識はなく、先祖が続けてきたことを絶やしてはいけないという気持ちと、講が存在すること、親戚でも無い五軒の家が、講でつながった地縁のコミュニティの大切さを強く感じていることは理解できた。

おわりに（まとめにかえて）

今年の北村の庚申講は、新型コロナの影響で、五月と七月は中止となったという。濱本イク子さんは「九月はようやく開催できたが、なんとか今後も続けたい。」と申し訳なさそうに語られていた。庚申講の本箱が新調された安政五年（一八五八）は、コレラが日本に蔓延した年である。単なる偶然かもしれないが、疫病退散の意味を込めて新調されたのかもしれない。それはともかく、コロナ禍で、グローバルな社会システムの一部が機能しなくなる中で、家族という最小単位のコミュニティの大切さが叫ばれるようになってきた。

二〇二〇年の十一月にも講が開かれたが、そこでは、過去に起こった北村のある高齢者の徘徊事象の経緯が語られ、行方がわからなくなった本人の家族とともに、周辺の人たちが様々に連絡を取り合い無事保護することができたという。また、近年は台風被害が酷く、日常的に地震等も含め災害に地域で備えることが必要だ。高齢になると、夫婦だけでは何もできない。何かあったときに自分たちの存在をわかっていて、すぐに対応してくれる地域の人たちの存在が必要だという当たり前のことであるが大切な話が出ていた。

現代の地域社会においては、自治会、いわゆる町内会の関わりについて自治会への未加入や、防災対策、空き家問題、高齢者の独居など、様々な問題が浮かび上がっている。自治会が機能して解決できる

ものももちろんあるが、一軒の家が、自治会だけでなく複数の繋がりを持っていることは重要なことである。

三〇〇年の伝統をどう引きつぐかという方法を考えるというよりも、庚申講のような、深い絆で結ばれた地縁のコミュニティも、一つの大切なコミュニティであるという認識を持って、今一度目を向けることが必要ではないかと改めて思うのである。

最後になりましたが、この取材にご協力いただきました北村庚申講の皆さん。そして、取材に同行いただいた大津市歴史博物館の和田光生学芸員、高橋大樹学芸員にこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

註

1. 窪徳忠『庚申信仰の研究 日中宗教文化交渉史』一九六一年 日本学術振興会
2. 窪徳忠『庚申信仰の研究』一九六三年 帝国書院
3. 成安造形大学附属近江学研究所『文化誌「近江学」創刊号』二〇〇九年 サンライズ出版
4. 平野実『庚申信仰』一九六九年 角川選書
5. 飯田道夫『庚申信仰 庶民宗教の実像』一九八九年 人文書院
5. 五来重『石の宗教』一九八八年 角川書店

近江の懷をめぐる 4

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川

亮

近江の懷をめぐる 4

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員 石川 亮

Name:

Ryo ISHIKAWA

Title:

Omi's "futokoro": Part four

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懷」とは「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業」^{なりわい}としてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

四回目となる「近江の懷をめぐる」は二〇一九年の暮れ、冬の中山道沿いの近江商人発祥の地の一つとしてあげられる東近江市五個荘、中でも最大の集落である宮荘の取材から始まる。年が明け二〇二〇年二月上旬にもう一度この地を訪れた時は既にマスクを装着していたことを覚えていて、私は取材をする中で現地人と会い、対話することを心がけている。それは自身が感じたその地の魅力や気づきに対し、現地人の見え方、感じ方を聞き出すことにある。例えば現地で長年受け継がれてきた「モノ」や「行事」に出会った時、その意味や理由を知として捉える以上に、何か独特の不思議さ、奇妙さ、滑稽さとも言おうか、そんな感覚が伝わってくる。それらはあたたかも唯一無二の彫刻のように見え、それは地域で長年育まれてきた感覚と捉えている。

しかし、二月上旬の取材を境に二〇二〇年は現地人と会うことが困難になった。この文書をまとめている二〇二一年一月時点で、新型コロナウイルス拡

大の三波が迫り、二〇二〇年の四月に緊急事態宣言が出されて以降、首都圏や都市圏において二度目の宣言が発出されている状況である。

新型コロナウイルス感染症が全世界を覆い、その脅威から行動自粛をせざるを得なくなった。当然、「近江の懷めぐり」は困難になる。それだけでは無い。私が勤務する大学の授業においても四月五月は休講、六月から感染リスクを避けたオンライン授業を行うなど、これまでに経験したことのない事態となった。七月に入ってからマスク装着、手指消毒を徹底し、密閉、密集、密接といわゆる「三密」を避ける生活が始まる。手探りではあるが、漸く近場からのフィールドワークから始めることになり、地域実践領域一年生の演習授業では大学の近隣である「仰木」に入ることができた。その間、パンデミックの経験のない我々は自宅に籠る生活が続く。これほどまでも長期間、自宅に居続けることが困難であることも身にしみて経験することになった。「仰木の里（一九九〇年代から宅地開発が始まった仰木の東側に広がる新興住宅地）」に居住する私は四月二日から六月十日までのほぼ毎日、仰木への散歩を始め、カメラを持参して思うがままに、目の前に映る風景や事物を撮影した。それは今後の行く末が予測しきれない菌瘵さと、自身の日々の心境の変化を

記録することにある。十週間にわたる記録から毎日の散歩で通い続けた仰木の抛り所「小椋神社」その参道に位置する「山地神社」は、私のモヤモヤする気持ちを落ち着かせ、自分自身と向き合う時間となった。その抛り所を「仰木の杜」と題し、近江の懐めぐりをする事によって自身の精神の「回復」から始めることにした。

七月に入って様々な地域から集まった学生と一緒に歩き出した仰木のフィールドワークにおいては、対面できることの喜びと、仰木の晴れ渡る空と風景が精神の「回復」へと導いてくれたのではないかと考えていている。

コロナ禍以前の暮らし最後の取材となった「五箇荘の宮荘」と、コロナ禍になって「自身で見つめる仰木」と「学生と共に見つめる仰木」の三つの懷を紹介したい。

一、宮^{みや}荘^{しょう}の普^み段^や着

二〇一九年の冬、ここ数年、年の瀬にフィールドワークすることが恒例となっている。それは師走の繁忙期から、一瞬解放され、多くは郷里の実家に戻る時間である。一年の溜まった汚れを落とし、新しい年を迎える準備は、自身を見つめ直し、冷静さを取り戻す時間と言ってよいだろう。そのような時間に、私は家の大掃除を一旦中止して「近江の懷」に潜り込むのが好きだ。日常からハレの日へ、少しずつ変化していく近江を見るのは、普段、氣にも留

めなかったことがあらわになってくる。今回は「懷の横綱」ともいうべき、街道（中山道）から少しはずれた街、五箇荘を訪れた。

五箇荘は言うまでもないが、近江商人発祥の地の一つとして有名である。今日も商人屋敷を残す街並みは、その景観が保たれ、中でも金堂地区は、重要伝統的建造物群保存地区に指定（平成十年十二月二十五日）されている。これまでに数回訪れ、そこで感じる五箇荘の街並みの印象は、それぞれの集落の中心に杜（神社）があり、それを囲むようにして街が形成されている様にみえている。以前湧水探索（鳩戸霊泉／齡仙寺で訪問した中地区は、小幡神社。学生と街並み紹介の映像制作で訪れた金堂地区は大城神社があり、今回訪れた宮荘地区も中心に五箇神社が鎮座している（写真1）。古代条里制が残っており、碁盤の目に沿う形の街並みは、どこの集落も景色が似ている印象だ。次に五箇荘の名前であるが、鳥羽院政期（一一二九―一一五六）、織山東麓にあった莊園「山前^{やまえ}荘」が「山前五箇荘」と称されたことに由来する。その主要な五つの莊園の一つ、北荘が現在の宮荘付近である。

この日は能登川から県道五十二号を南東方向へ進み、途中で直角に右折して、五箇荘の集落に入った。五箇神社の西側を通り過ぎる頃、角地の仏閣で大人が数人、暮れの大掃除をしているのが見えた。チラッと覗くと石仏が目に入り、思わず足を止めてしまった。すると「良かったら中へ」と声をかけていた。早速、「懷へ」と思い、お邪魔すると、堂内

には上宮太子（聖徳太子）の作と言われる木彫座像の大日如来と石仏立像阿弥陀三尊と地藏菩薩が安置され、地域信仰の抛り所となっている（写真2）。煤払いが終わり、正月飾りが施される際のひと時に長年この地域のお世話をされてきた五箇神社氏子総代長の高田^{たかだ}勇^{いさむ}さんにお話を伺うと、ここは寶光庵^{ほうこうあん}、通称大日堂と呼ばれているとのこと（写真3）。神仏分離の頃、五箇神社の本地仏と言われる像を隣接地に移動させる必要があり、明治二十二年（二八八九）現在地に移築されたと伝わっているそう。地元の人々によってこれまでの信仰、抛り所として何ら変わらず、大事に思う気持ちがある。受け継がれていることに気付かされる。仏前で合掌して帰途の用意をしていると、高田さんの差し出した一枚の写真が目に入った。それは毎年四月の第二日曜日に行われる五箇祭、例大祭日の大神輿を担ぐ場面である（写真4）。その神輿は周囲の景色と比較してかなり大きく見え、たくさん大人の人が担いでいるのがわかる。聞くと日本最大級の大神輿と呼ばれており、長さ八・四五メートル、高さ三・八メートル、嘉永四年（一八五二）着工して六年の歳月をかけ、安政四年（一八五七）に完成したとされる。担ぎ手は八十人以上必要とあり、並々ならぬ大きさであることがわかる。そこで私は担ぎ手が着ている衣装に着目した。近江でよく目にする神輿の担ぎ手の衣装は、上半身は腹巻に法被、下半身は半股と足袋姿で、全て白に統一されている。私の地元で行う仰木祭では、それに豆鉢巻や赤、青、黄などの鉢巻を

頭や首元、足首に巻いて派手に見せている。さらに仰木は中世に祭の起源をたどることから、役職につく人は素襖（すおう）（室町期の武家装束、江戸中期は下級武士の礼装）を着用している。また袴着用は近江の祭りで目にすることが多い。高田さんに衣装のことを聞くと「これは近江商人の行商に行く時の服です。」と返事が返ってきた。上半身は紺色の羽織に腰巻、下半身は白い股引に紺色の脚絆を巻き、草鞋を履いている。「みんなが持つっている揃いの服で、普段着です。」と付け加えられた（写真5）。祭の話をする高田さんは誇らしく、年に一度の例大祭はハレの日であり、この日の為に日々があることが伝わってきた。私はこのような慣習を受け継ぐ伝統と精神を本当に羨ましく思う。その日は帰途につく、ガチャコン電車の異名を持つ近江鉄道に五箇荘駅から乗車し、暮れゆく東近江を車窓より眺めつつ、一旦、懐から抜け出た。

ひと月ほどして、高田さんと連絡を取ることができた。その日は暖冬が続く中で、目の覚めるような寒波が押し寄せ、東近江一帯は白い風景に様変わりしていた。再び大日堂にあげてもらい、合掌した後、祭装束を見せていただいた。それは先代から引き継がれて、現在も息子さんが使用する現役の近江商人の「行商の姿」である。同席していただいた長年、地域振興に努めてこられた諏訪一男さんの話では「行商から戻って、祭りで神輿を担ぎ、終わると、そのまま行商に出たんですわ!」と、羽織の細部を見ていると手縫いであることがわかる。脚絆も今日

では揃えるのが難しいようだ。このようにモノが伝わるリアリティーにこそ、歴史を伝える説得力を感じる。五箇の名は「五穀に恵まれない土地」から始まり、五箇神社は「五箇の森」と呼ばれており、ここに地名の起源があるとも伝わっている（写真6）。明治五年に北ノ荘村から宮荘村に改称され、五箇荘町宮荘となった。平成十七年の大合併時に、自治会の合議制により宮荘は五箇荘の名をつけない事とし、今日に至っている。

なお、宮荘の歴史詳細は諏訪氏からの聞き取りと、開設するホームページが参考となっている。さらに、二〇一三年に『先人・悠久のあゆみ宮荘町歴史（誌）年表』の発刊、二〇一八年には、四年の歳月をかけ五箇神社の歴史をまとめた歴史誌『鎮守の神様 五箇神社の歴史（誌）と宝物』共に諏訪氏の編集により発刊されている（写真7）。神社に保管されていた千冊以上に及ぶ古文書と資料をまとめ編集されており、懐の奥深さに圧倒される。

石仏がチラツと見えたことから祭衣装に転じ、深い懐にどっぷりと浸かってしまった。

高田、諏訪両氏には、この地の起源から、古代条里制、水争いの記録、学校教育、祭りなど、その詳細に至る様々なお話をいただいた（写真8）。「五穀に恵まれない土地」から行商に出て、街道を行き来する。生身で世相を感じ、時の政に翻弄されない、自前の判断で暮らしを継続する態度こそ、近江人の姿ではないだろうか。この普段着はそのことを切に伝えている。



写真5 五箇祭の祭衣装(宮荘の普段着)



写真3 寶光庵、通称大日堂



写真1 五箇神社



写真6 国道八号線より「五箇の森」を望む



写真4 五箇祭にて神輿を担ぐ様子



写真2 大日堂の石仏



写真8 宮荘の人
(右: 高田勇さん、左: 諏訪一男さん)



写真7
左: 「先人・悠久のあゆみ宮荘町歴史(誌)年表」
右: 歴史誌「鎮守の神様 五箇神社の歴史(誌)と宝物」

二、仰木の杜

不要不急の外出自粛が叫ばれる緊急事態宣言が全国に発出されたのは二〇二〇年四月十六日からである。四月一日に新入生を迎えるはずの、私が勤務する成安造形大学の入学式も中止となり、先のみえない、相手のみえない格闘の時間が始まった。

その翌日四月二日から始めていることがある。それは自身の体力維持として課していた散歩である。自宅のある「仰木の里」から一二〇〇年以上の歴史

があるとされる集落「仰木」への周回だ。地域のよりどころである「小椋神社」を参拝し、仰木峠から続く比叡山の山容を仰ぎ見て、棚田の脇道を下りつつ琵琶湖を眺め、対岸にそびえる三上山を確認して、帰途につくコースである。四月二日からカメラを片手に持ち、気になるものが目に入ると、とにかく撮影することに決めた。それはいつも見ている同じ風景が、何か違う様に見える気がしたからである。また刻一刻と社会状況が変化する中、自身のモヤモヤする気持ちや言葉で表せない心境、感覚を何らかの方法で記録する必要があると考えたからである。

更に、この文章はそれから約一ヶ月経った五月三日に記すことにした。それは小椋神社例祭、泥田祭(仰木祭)の本祭当日であり、五基の神輿が集落を練り回る。それは仰木の集落が一年で一番エネルギーを放つハレの日に他ならないからである。

二〇二〇年の当日、いつも通りの周回コースの散歩に出た。例祭は神事のみが執り行われたらしく、いつもと変わらない穏やかな仰木の風景がそこにあり、例年の賑わいはなかった。私が決まって祭りを堪能する場所があるのだが、今年も行ってみた。それは小椋神社から参道を通って一の鳥居までの間に、奥宮である滝壺神社へ向かう闇籠神参道と交差する場所がある。その角地にひっそりと佇む小さな杜の辺りがその場所だ。いつもみている田園風景にポツリと浮かぶ小さな杜、山地神社を紹介したい(写真9・10)。

杜の敷地は、十メートル四方あろうか、そこに数

本の本々が祠を覆い囲む様にあり、小椋神社参道に面して石の鳥居が建っている。中を覗くと小さな祠と青々と茂る苔庭をみる事ができる(写真11)。周囲にはお地藏さんが並び、いつも野花が添えられる何とも愛らしい杜、祭神は弁内侍である。新修大津市史によると、弁内侍は、似絵の名手藤原信実の娘で、鎌倉時代中期の女流歌人である。後深草天皇(在位一二四六―五九年)の側近の女官(内侍)として仕え、正元元年(一二五九)天皇の譲位とともに職を退き、文永二年(一二六五)妹の死にあつて出家した。その後、父と姉とも死別し、仰木の山里で静かに晩年を送ったといわれている。

長年、この杜の守りをしてきた伊藤士良さん(写真12)に話を伺うことができた(写真12)。地元ではこの杜を「針の宮(針殿)」「ツ〇ボの宮」と呼んでいる。針の宮は弁内侍が針仕事に長けていたといわれ、仏道修行のため仏像を刺繍していたと伝わっている。杜の前の坂道(小椋神社参道)はハンドロ坂と呼ばれ、針殿坂がなまತ್ತと考えられる(写真13・14)。次にツ〇ボの宮であるが、これは局の宮がなまತ್ತか、あるいは弁内侍が仏道修行に没頭するあまり、村人が何か言い寄っても聞く耳を持たなかったと推測することもできる。「今ではそんなふうに呼ぶ人も減ってしまったけどなあ。」と伊藤さん。「この裏手に、針塚があるんやけどなあ」と、集落から農地へ抜ける小道の途中にそれは存在する(写真15)。「これも山地神社と地続きなんや」と話された。針塚は弁内侍が櫛や針を埋めたこととされ、毎

年三月十五日に内侍を供養する祭りが地元の方々に
よって行われているとのこと、更に針供養もあり、
使えなくなった針を蒔藁に刺して祀られるそう
だ。供養の時こそ、柔らかいところに刺して祀るの
であらうか、日吉大社で料理人によって執り行
う包丁祭のことを思い出した。ここでも人々の暮
らし、生業を支える道具への「畏敬の念」が、弁
内侍の伝承を通して今日も持続されているのであ
らう。

さて、山地神社の名称についてであるがその詳
細はわからない。伊藤さんが山地神社のお世話を
する様になったのは戦後、杜の隣地に住むことにな
ったからのことだそう。それまでは藪が生茂る杜であ
り、斧塚と山地神社は小道で繋がっていた様だ。ま
たその路は奥宮の滝壺神社へと通じる参道であり、
豊かな水を仰木に注ぐ谷筋の水路と並行しているの
である。そのことから推察すると奥宮へ続く山路、
山地と里宮（小椋神社）の参道が交わり、この角地
が奥宮を指し示す場として、この名が付いたのでは
ないかと考えることができる（写真16）。

仰木は奈良期、大津遷都の際に伽太夫仙人が開村
した伝承に始まり、平安期には清和源氏の礎、多田
満仲を摂津国より迎え入れた伝承がある。それらは
仰木祭を通して後世に受け継がれてきた。集落の
存続は絶えず客人を招き入れ、少しずつ変化しなが
ら経済、文化を持続してきたのだ。

今、世界で起こっていることを俯瞰することは困
難を極める。資本主義競争を激走してきた社会は、
今こそ自国を優位にするのではなく、分かち合い、

カバーしあう考え方が、必要とされているのではな
いだろうか。それを本来共存し、いつの時代も絶え
ず横にいたはずの存在（疫病）が教えてくれたと考
えてはどうだろうか。いつの間にか我々が外部にし
てしまっていたこれらと共に生きていくべきなのか
もしれない。

親しみを込めた名前と呼ばれてきた「仰木の杜」
はそのことを伝えている。



写真 11 山地神社の鳥居と祠



写真 9 仰木の杜「山地神社」1



写真 12 伊藤士良さん(山地神社の前にて)



写真 10 仰木の杜「山地神社」2



写真 13 ハンド口坂（小椋神社参道）



写真 15 農地へと抜ける道沿いにある斧塚



写真 14 ハンド口坂より山地神社を望む（奥：小椋神社鳥居）



写真 16 小椋神社参道と奥宮への参道がポイント（右が山地神社）

三、仰木の学生

二〇二〇年五月二十日から漸くスタートすること
のできた前期授業は八月五日を最終日として無事終
えることができた。この様な「無事終えること……」
といった感じになったことは恐らく初めてであら
う。五月の終わりまではオンライン授業、六月に入っ
て対面授業を恐る恐る始め、七月からは地域実践領
域一年演習授業のメインであるフィールドワーク授
業に入った。

「三密」を避けることの困難さは現在も日々奮闘中であるが、この「新しい生活様式」にいち早く慣れることに舵を切った。毎朝の検温と携帯用消毒スプレーを常時所持すること、マスクの着用は当然であるが普段の自分の行動を記録することで自身を管理していく。また危険を感じたら躊躇なくオンライン授業に戻し、コミュニケーションが継続できる状況をつくること、それが我々のフィールドワーク研究持続であり、「新しい生活様式」なのだ。

七月に入って本来なら四月下旬から進める大学の近隣「仰木」フィールドワーク授業を始めることができた。ここでの目的は地域を知ることから、その魅力を見つけ出し発表することにある。学生達はこれまでのオンライン授業にて、自身の地元の魅力、気付きの紹介を試みてきた。ここで同じ志を持つ学生と対面し、リアルな体験が始まっていく。そこで彼らが目にした魅力や気付き、新たに感じた自身のことを書き記したいと思う。

七月一日、梅雨に入り予期せぬ集中豪雨が続く最中、この日は快晴である。グルーブを分けながら、前述した私が毎日行く仰木周回コースを歩いた。新興住宅地の仰木の里から仰木へと抜ける棚田が広がる場所では、「やっと始まった！」などの言葉が自然と学生から溢れ出た。小椋神社では年に二回、六月の終わりと大晦日に執り行う「茅の輪くぐり」を目にする。初耳の学生、初めて目にする学生に対し、

「茅」がしめ縄に使われること、神聖なイメージがあり、無病息災、疫病退散を祈願する意を伝え、八の字を描く様にくぐり抜けることなどを伝えると、即、列を組みながら「祓いの儀」が始まった。例年の四月授業では味わえない光景である（写真17）。

次に「仰木」の暮らしを少し体験するため、上仰木に位置する上坂達雄さん宅に向かう。ここでは例年、農村の暮らし、比叡山との関係、信仰、年中行事、祭りなどの話を聴きながら「出会いと学び」のスタートを祈念する「ハレノヒ料理」を振る舞ってもらい、食と暮らし、信仰が一体となっていることを、洗礼を受けるかの如く、体験を通して学んでいる。「納豆餅」「鮎鮎」「鳥すき焼き（四つ足の動物を殺生しない）」を皆で囲みながら学生の出身地との違いを話し合う時間になるのであるが、今年は自粛せざるを得なかった。代わりに上坂さんから「納豆餅と草餅」をお土産として用意していただいた（写真18）。

さてここからは、四週間に渡って「地域の気付きと魅力探し」の中から学生が見つけ出した魅力を紹介したい。

・仰木の坂道（写真19）

仰木は馬の背と呼ばれる尾根道添いに向かい合う様に集落が立ち並んでいる。その尾根道から南側の斜面を降りると、地形に従う様に路地道（坂道）が幾重にも絡み合っている。岡山出身の学生は坂道の景観で有名な尾道と比較しながら、暮らしと共にあ

る仰木の坂道に着目した。年季の入った鉄製の手すりや坂道の景観を形成する石垣にも注目しながら遠くに見える琵琶湖、開けた空のその光景の魅力に取り憑かれている。

・謎の神社（写真20・21）

沖繩出身の学生はあちらこちらにある小さな神社や祠の多さに驚きを隠せない様だ。地図に記載されていない稲荷、弁天、地藏など神仏問わず様々な地域の拠り所に気付いた。稲荷や弁天が祀られる意味と地域の生業との関係を見ながら、祠の横に石で彫刻された由緒書に気付き、次への問いを自ら導き出している。

・くねくね道とまっすぐ道（写真22・23）

社会人としての生活に区切りをつけ、地域へ眼差しを向けることから学び直す学生は、くねくねと棚田に沿って曲がる道と谷間の田畑を貫く一本のまっすぐな道に気付く。現地の人に声をかけ聞き取りをすると、前者は祭りの還御道、後者は圃場整備によって出来た道であることを知る。同じ田畑の景観から対象的な風景に着目し、その意味や背景を知る。

・郵便ポストと繋がり（写真24）

高知出身の学生は平尾地区の日常の暮らしに焦点を当てる。道沿いの綺麗に整えられた生垣に心奪われたつもキチンと据えられた赤い郵便ポストを発見する。一見静かな風景に感じるが郵便ポストに回覧

板が入っていることから地域の人たちのつながりを想像し、ご近所付き合いのある温かみを魅力として表現している。

・覗く学生（六鉢地藏尊）（写真25）

比叡山の麓、上仰木の集落が終わるところに六鉢地藏尊のお堂がある。恵心僧都源信作と伝わる六鉢の地蔵を掘り込んだ石仏がお堂の中に鎮座している。お堂の隙間から同行した学生がそれを見ている様子。しばらくすると目が暗さに慣れてきたのか？「真ん中に阿弥陀さんがおるで！」と気付く、その真剣に確認する眼差しを少し離れた位置から捉える滋賀県水口出身の学生。

彼らは、対面授業ができる喜びを噛みしめつつ、はじめて出会い、これからの学びの同志でありライバルになるであろう相手と新しい土地でのフィールドワークに取り組んだ。それぞれ別々の場所から同じ目的で集まり、仰木を歩くことから学びが始まっている。コロナ禍を正面から経験し、大きく変わりゆく社会、地域、自身のあり方に向き合いながら新しい生き方を導き出していくのだ。



写真 17 小椋神社にて茅の輪くぐりをする学生



写真 22 くねくね道とまつすぐ道 1



写真 20 謎の神社



写真 18 上坂達雄さん宅で仰木の暮らしについて学ぶ



写真 23 くねくね道とまつすぐ道 2



写真 21 謎の神社と由緒書



写真 19 仰木の坂道

最終日のプレゼンテーションは再びオンラインの授業となったが、そこで自らの意見を発表する彼らは「仰木の学生」になっていた。

追記

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二一年一月現在まで十五回の連載が継続されており、二〇二〇年一月より二〇二〇年八月まで（二〇二〇年十月は休み）の第十三回から第十五回までのオリジナル文を可能限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

紀要の冒頭は、二〇二〇年全世界に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響下で私自身がその瞬間に感じ取り、行動に起こした記録をできる限りの冷



写真 24 郵便ポストと繋がり（実際は回覧板が入っている。）



写真 25 覗く学生（六鉢地藏尊、実際は格子戸に顔をつけている。）

静さを保ちながら書き記した。

コロナ禍の生活が手探りで始まりながらも自身の感染に対する不安は現在も払拭できない状況である。また自身が行動することで他者への感染を広げるかもしれない不安もある。様々な工夫をしながらの生活が始まった中、自身が始めたことを一つ紹介しておきたい。それは二〇一七年頃から少しずつ始めていたロードバイクでめぐるフィールドワークである。琵琶湖を擁する近江（滋賀県）は昨今「ピワイチ」と称して、自転車で琵琶湖を一周する試みが盛んになってきている。行動自粛をせざるを得なくなり、人との接触を極力抑えたい状況下において、ロードバイクに乗ることはそのストレスを解消させてくれる。以前にも増して自身の健康管理に対する意識は高まり日頃からの体調コントロールは欠かせないものとなっている。例えば毎朝の検温の習慣がついたことで、平熱がどれくらいあるのかを知ることになった。春の緊急事態宣言下で散歩が日課になったことから毎日身体を動かす習慣がついてきている。その延長でロードバイクに乗ってサイクリングする習慣につながってきたかもしれない。毎日二十分の仰木周回コースから一時間の湖西地域周回コースになり、登れなかった坂道が登れるようになる。同時に心拍数に気を配るようになり、効率良いケイデンス（一分間のクランク回転数）を一定にキープできるようになってきた。そして持久力を高めることで免疫力が高まり自身の体力も安定に繋がるとイメージしている。何より自身のエネルギーとペース

で、活動や行動を起こす表現の原点に立ち返っている様に思えるのだ。コロナ禍は感染の恐怖のみならず自身を見つめ直すことに繋がっている。反面これまで大切にしてきた対話でのコミュニケーションがやりづらくなった。マスクをしていない人、大声で楽しげにおしゃべりする人などを見かけるとつい注意したくなるのは私だけであろうか？ これまでなんとも思わなかったことに対し敏感に反応してしまう様になった。そして感染状況が収まらないことに対し、他の誰かを優先にしようとはしていないだろうか？ 二〇二〇年の「近江の懐めぐり」は制限されたことによってそのことに気付かせてくれていた。

そして「近江の懐」は人間が肉体と精神のバランスを「回復」していこうとする姿を注視している様と思う。

編集後記

一年前の前号の編集後記で、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されていることを書いていました。今も状況は好転することなく、日々、グラフや映像で視覚化された目に見えないものの脅威に対して新しい生活様式を実践しながらコロナ後の未来を模索しています。人との距離をとり、マスクで表情も読み取りにくい、それだけでも日常の暮らしやハレの日、お祭りや行事に多大な影響があります。この一年間は日常を自粛し、ハレの日の多くが縮小や中止となりました。日本の文化が凝縮され継承されてきたハレの日の「かたち」や暮らしの「かたち」、「ハレとケ」のありようが今後どのように変わっていくのか大変気がかりです。

本紀要では客員研究員と本学研究員からの論考三編を掲載します。

高梨客員研究員からは、愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告を寄稿していただきました。加藤研究員の論考は、天津市真野北村地区に今も続く庚申講の調査について、庚申信仰と三井寺や天津絵との関わりなどにも触れ、地縁のコミュニティの意義を考察しています。石川研究員は、東近江市五個荘の宮荘の取材と大学近郊の天津市仰木の取材および学生との活動について「近江の懐をめぐる4」というかたちで紹介しています。近江学の講座はこの一年間すべて中止となったため、「講座の報告」はありません。

編集担当 永江弘之

成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第10号

発行日 令和3年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学
附属近江学研究所

〒520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

小寄善通

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社